みんなで進めよう
茨城農業改革

結城農業かわら版

第78号
H27年3月20日

発行　結城地域農業改良普及センター
TEL　0296-48-0184　FAX　0296-48-2682
HP　http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/noucenter/fukyu/yuki/

平成26年度「未来につながる農業フォーラム」を開催

２月17日，結城地域農業改良推進協議会と普及センターは，ＪＡ北つくば結城支店において「未来につながる農業フォーラム」を開催しました。当日は，農業者，集出荷法人職員，関係機関等80名が参加しました。

講師には，埼玉県で農業生産法人「ナガホリ」を経営する永堀社長をお招きし，雇用を活用した大規模周年経営の取り組みについてご講演いただきました。「パートの３分の２は高齢者。経営には，高齢者のパワーは欠かせない」，「作るだけでなく，いかに売るかが大切」等の永堀氏の自信に満ちた言葉を，参加者は真剣な表情で聞いていました。

その後，結城市役所から「結城ブランドの取り組み」について事例紹介がありました。市で平成２５年度から取り組みはじめた「結城ブランド」の考え方や，主な認定品目の紹介がありました。また，普及センターから農薬の短期暴露評価による農薬の使用方法の変更について情報提供を行いました。

来場者からは，「雇用の方法や考え方について参考になった」，「売れるものをいかに戦略的に生産するか考えさせられた」等の感想が聞かれ，来場者の意識改革につながる有意義なフォーラムとなりました。

普及センターでは，今後も各組織と連携しながら，日本一の野菜産地を目指した園芸産地の振興に取り組んでいきます。

平成26年度第10回農業学園アグリ講座および閉講式を行いました！

3月13日，普及センター会議室において，平成26年度の第10回農業学園アグリ講座および閉講式を開催しました。講座では，当普及センター職員を講師とし，再生産価格や複式簿記といった農業経営管理の基礎知識について学びました。

農産物を生産するのに要した総費用である再生産価格を把握することでコスト削減や有利な価格決定の根拠にできること，また，簿記記帳については，実際にパソコンを操作しながらその仕組みを学び，一見複雑ではあるものの自分の経営を見直すうえでは有用であることを認識しました。

また講座終了後に行った閉講式では，小島センター長から「これからもたくさん勉強していってもらいたい。その際には普及センターもぜひ活用してもらいたい。」と農業学園生にエールを送りました。

普及センターでは，来年度も地域の担い手となる若手農業者の育成と仲間づくりを支援できるような講座を企画していきます。

常総市　佐藤宏弥・博子夫妻が天皇杯（畜産部門）を受賞されました

常総市菅生町で，繁殖から肥育までの肉用牛一貫経営を営む，常陸牛指定生産農家の佐藤宏弥さん夫妻が，第53回農林水産祭の畜産部門において農業者最高の栄誉である天皇杯を受賞されました。

地域の水稲農家と連携した稲WCSの生産利用や冬季水田放牧の取り組み，そして何よりも繁殖・肥育の両部門における高い飼育管理技術が評価されたものです。佐藤さんは78頭の繁殖牛で分娩間隔12か月の一年一産を，65頭の肥育牛出荷で上物率（格付け等級A４以上の常陸牛格付け率）100％を実現しています。

佐藤さんは宏弥さん夫妻，後継者の治彦さん夫妻の4人の労働力で，それぞれ役割を分担し，家族労働のみでこの高いレベルの経営を築きあげました。今回の佐藤さんの受賞が起爆剤となり，地域の肉用牛生産がますます発展することが期待されます。

水稲の高品質・多収栽培のためには健全な苗づくりが重要です！

近年，育苗期間の気温の変動が激しく，やけ症状や苗立枯病が多く発生しています。天候不順によりダメージを受けたイネは病気や障害が出やすくなるため，これらの被害がない健全な苗を植え付けることが大切です。

例えば，浸種の積算温度が不十分なまま催芽の状態をよく確認せずに播種をしたことで，発芽まで時間がかかり，保温シートで被覆する期間が長くなってしまったケースが多く見られます。これにより，晴天時の急な温度上昇でやけ症状が発生します。さらに，過湿状態に長期間おくことになり（育苗箱の消毒を行っていなかった場合は特に）苗立枯病が多く発生します。健全な苗を育てるためには，種子の浸漬･催芽･播種後のハウス内の温度や水分管理をきちんと行うことはもちろん，育苗箱の消毒を毎年適正に行うことも非常に重要です。

〈浸種から出芽までの流れ〉

浸種積算温度	100～120℃（水温10℃で10～12日間浸種）
催　　芽	28～30℃で15～20時間加温し，ハト胸状態にする
播　　種	箱あたり乾籾160g（催芽籾200g）前後で播種
出　　芽	もみ枯細菌病等の発生を防ぐため，30℃以上の高温にしない

病害虫ノート　メロンつる枯病　初期防除を徹底しましょう

主に茎，葉，葉柄に発生し，特に接木栽培で発生しやすい病害です。茎では黄褐色となりヤニを生じるのが特徴です。湿度が高くなると，つる割病のように病斑が水浸状となる症状が現れますが，つる枯病では病斑上には多数の小黒粒が発生するため，これが診断のポイントとなります。

つる枯病菌の胞子は水滴により伝播するため，株元の土をできるだけ乾燥させましょう。また，発病株の残渣や資材に残った巻きひげも伝染源になるので，取り除きましょう。

★編集者より★　昨年4月に普及センターに来てからは，慣れない仕事の連続であっという間の一年でしたが，色々なことを学ぶことができました。地域の農業の発展に貢献できるよう，これからも頑張ります！（後藤）